

朱雀 成子（英語学・英文学）

シェイクスピアの女性表象に関する研究

本論文はフェミニズム/ジェンダー批評の視点からシェイクスピア劇における女性表象の特質を明らかにするものである。シェイクスピアテキストに表現される女性像は作品毎に異なり多彩であるが、本研究では特にジェンダーの権力関係に焦点を当て六編の作品を選び、その各々の女性像の問題点を分析した。六編の作品は、『アントニーとクレオパトラ』（第一章）、『じゃじゃ馬ならし』（第二章）、『ハムレット』（第三章）、『コリオレイナス』（第四章）、『冬物語』（第五章）、および『テンペスト』（第六章）である。

各テキストでは、強い自己主張ゆえに魔女や娼婦呼ばわりされる女性、セクシュアリティ（女性性）を演技する女性、母性、父権制、女性同士の連帯（シスターフッド）等、ジェンダー批評における中心的な主題が展開する。本研究の特色は、特に母性概念の分析を詳細に行ったこと（第三章、第四章、第五章）、女性連帯の主題をテキストの重要なモチーフとして示したこと（第三章、第五章）、父娘関係の心理分析的意味をジェンダー批評として明らかにしたこと（第六章）にある。

第一章では、クレオパトラがエジプトの国家代表として男性的性質（男性性）をより顕著に示すこと、またアントニーも女性的性質を内包することを指摘し、この作品で性的価値の逆転が生じていることを論証する。ジェンダーの流動性が本作品では主体客体の転換を招くことを指摘し、シェイクスピア批評における通常理解を修正する新たな視点を示した。

第二章では、ヒロイン、キャタリーナの「じゃじゃ馬」ぶりが夫によって「飼いなら」される状況を、彼女が従順を学ぶというよりそれを演じるのだと仮定する批評（リュース・イリガライ）と同じ観点に立ち、ヒロインの主体性の確立を論ずる。

第三、四、五章における母性概念の分析では、特に母の非在という状況（『冬物語』論）に注目し、シェイクスピアが原典『パンドスト』にない、非在からの母の復活をなぜ挿入したかを十分な論拠とともに論じ、テキストの表面的読みでは捉えにくい母娘の絆という主題の重要性を明らかにした。この論点は第六章における父娘関係の議論とパラレルをなし、ジェンダー批評における新たな視点として親子関係の問題点に鋭く着目するものといえる。第四章『コリオレイナス』論では、主人公の母ヴォラムニアの母性を論じる。本章では息子を管理支配する母性の否定的性質を分析し、批評的に閑却されがちな母性の側面を明らかにした点で高く評価される。第三章における母性論はガートルードの再評価として示される。慣習的なガートルード批評と異なり本論では彼女を娼婦的女性とみなす。母を「悪い女」とする息子ハムレットとのコミュニケーションは成立しない。オフィーリアとハムレットの関係も意味は異なるが同様である。ガートルードの母性はハムレットを最後に救うが、オフィーリアは単に無の存在となる。論者は、この三者間のコミュニケーション断絶の関係を、ガートルードがオフィーリアを息子の妻として偲ぶことにより、三者の家族的人間関係を最後に復活させたことを実証的に示し、娼婦と見なされるガートルードの母性について新たな解釈を示した。特に二人の女性の連帯を重視する視点は従来のハムレット批評には見られない新鮮な議論となっている。

第六章では、ヒロイン、ミランダを、父親により女性性を管理される犠牲者であると同時に父親の政治的復権の願いを実現し得る男性性を内包する女性として考察する。幻想と現実が交錯する本作品におけるミランダの複雑な役割は、さらに恋人ファーディナンドとの関係、異界の女シコロクスとの対比的視点等と共に議論され、ジェンダー解釈の新たな可能性を示した。

以上本論文は、批評用語、周辺主題に対する展望等に整理の余地はなおあるものの、今日のフェミニズム/ジェンダー批評として、論点視点の設定、議論の展開等において十分に深い考察を行い、かつ母性論等の重要な知見を提示した批評的貢献は大きく、先行研究として優れた業績であることは明らかである。よって本調査委員会は、申請論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認める。